
[実践報告]

地域ミュージアムの連携による 中山間地観光への取り組み

高木朋美

一般社団法人鉄の歴史村地域文化研究所

[PRACTICAL REPORT]

A Project for Developing Tourism in Semi-Mountainous Areas through Cooperation with Regional Museums

Tomomi TAKAKI

Research Institute of Regional Culture in the Village of Iron History

しまね 地域共生センター 紀要

*Bulletin of Shimane Center for Enrichment through Community,
The University of Shimane Junior College*

vol.

2

September
2015



島根県立大学短期大学部
松江キャンパス

[実践報告]

地域ミュージアムの 連携による 中山間地観光への 取り組み

高木朋美

一般社団法人鉄の歴史村地域文化研究所

キーワード

地域ミュージアム

地域づくり

[PRACTICAL REPORT]

A Project for Developing Tourism in Semi-Mountainous Areas through Cooperation with Regional Museums

Tomomi TAKAKI

Research Institute of Regional Culture in the Village of
Iron History

Keywords

regional museums

development of regional areas

1 はじめに

2014年、内閣官房に「まち・ひと・しごと創生本部」が設置された。日本における人口減少と東京一極集中という問題に対し、その解決のなかで地方再生への取り組みが求められたものである。基本目標として、「地方における安定した雇用を創出する」「地方へ新しいひとの流れをつくる」「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」「時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する」が掲げられている。

しかし、こうした東京一極集中への課題は、地方が長らく直面してきた課題である。

昭和40年代、匹見町（現益田市匹見町）と島根県から「過疎」という言葉が生まれた。島根県の過疎化は、基本的には昭和30年代以降の日本経済の高度経済成長に伴って、農山漁村を中心とする地方の人口が急激に都市、特に大都市に吸引されたことに起因するものである。現在でも島根県内の19市町村のうち、全ての市町村が過疎地域を有している。

島根県雲南市吉田町（旧吉田村）においても、昭和30年には4,963人の人口があったが、昭和55年には2,829人にまで減少していた。

このような危機感から、「鉄の歴史村づくり」への取り組みがスタートした。スタートから約30年を経た現在、「定住の地として選択される地域」を目指すなか、地域の民間団体による「知的観光地」を目指す取り組みを紹介する。

筆者は、鉄の歴史村において活動する民間団体の事務局として、平成17年より事業に関わってきた。

2 鉄の歴史村づくり

島根県雲南市吉田町（旧吉田村）は、日本固有の製鉄法「たたら製鉄」の一大産地として栄えた地である。たたら製鉄によってつくられる玉鋼は日本刀の原材料であり、現代の製鉄技術ではつくり出すことができないものである。当地での製鉄

業は、鉄山経営者・田部家により室町時代の頃から大正12年までの長きにわたって地域を支えてきた。

製鉄産業に替わったのが製炭業だったが、昭和30年代に起こったエネルギー革命により、地域産業は衰退し、働き手となる若者が都市部へ流出する過疎が進行した。

こうしたなか、昭和57年から過疎脱却への試みが始まった。発案し、一貫してこの事業を推進してきたのは、当時、吉田村役場総務企画課長の藤原洋氏であった。吉田村の地域資源として最もポテンシャルの高いものとして発見したのが「たたら製鉄の歴史」であり、村内には永代たたら製鉄炉として唯一残る文化遺産「菅谷高殿」（写真1）とその集落があり、たたら製鉄技術の記録映画『和鋼風土記』が残されていた。

こうした地域資源をもとに、行政と村民らが一体となって「たたら製鉄」の歴史を基盤として地域再生に取り組んでいった。



写真1 菅谷高殿(国指定重要有形民俗文化財)

この地域再生のプロセスは、有形・無形の歴史文化の資源を「保存」し、それを広く「公開」し、そして「再評価」活動を行い、交流活動や経済活動へと「発展」させることで地域再生を図ろうとするものである。

有形・無形の文化遺産の「保存」「公開」として、吉田村は、昭和59年から菅谷たたら山内復元整備を行い、次いで鉄の歴史博物館(写真2)を整備した。この博物館は1号館と2号館で構成

され、1号館は「たたら製鉄とその技法」、2号館は「鉄山経営と鍛冶集団」をテーマとするものである。



写真2 鉄の歴史博物館

さらに、製鉄炉の変遷を広い視点でとらえた鉄の未来科学館の整備、また、たたら製鉄技術の解明と伝承のための現代たたら、鍛冶体験を行う鍛冶工房を整えた。そして、これらを一体的に運営し、学術的価値を高めていく主体として、財団法人鉄の歴史村地域振興事業団を設立した。

次いで、「たたら製鉄」を多角的な視点から「再評価」する国際シンポジウムを開催(1986-1993)。「人間と鉄」「地球と鉄」をテーマとし、技術史、産業考古学、デザイン、文化人類学、生命史学、建築学など各分野の第一線で活躍する専門家を招へいたものであった。こうした再評価活動により、「鉄の歴史村」は多様な人々とのネットワークを形成し、情報交流の場となり、知的ストックを蓄えることとなった。

次の「発展」へのプロセスのなかで、たたら製鉄史の「文化」と経済的豊かさを生み出す「産業」との間に架けるブリッジとして「交流」への取り組みが不可欠となる。

交流事業として、鍛冶工房や現代たたらの体験活動、コンベンションの開催、国際交流等を次々に展開していった。そして、交流によって発生するサービスやお土産といった需要に応える主体として第3セクター・株式会社吉田ふるさと村が誕生し、農産加工品の製造・販売等を展開している。

しかしながら、こうした活動は約10年の間、一時停止し、さらには「平成の大合併」と言われる

市町村合併によって平成16年に吉田村は雲南市となり、「鉄の歴史村」としての意識も薄れつつあった。

このような状況にあって、平成16年には住民有志が中心となってまちづくり会社を設立し、交流拠点となる古民家の運営に乗り出した。翌年には同じく地元住民が中心メンバーとなったNPO法人を設立し、プロモーション活動、交流イベントの開催、モニターツアーの実施などに取り組んできた。

そして、鉄の歴史村づくりのなかで蓄積されてきた地域資源を調査・研究し、これを伝えるための組織として平成25年、一般社団法人鉄の歴史村地域文化研究所を設立した。

3 地域ミュージアムからの地域づくり

「鉄の歴史村づくり」が始まったのは昭和50年代後半であったが、この時期、「地方の時代」が叫ばれ、各地で個性ある地域づくりを目指した取り組みが行われていた。こうした中、地域独自の歴史や文化に着目し、地域のアイデンティティ確立の場として、次世代への伝承や学習の場、外部との交流、観光といった地域振興の拠点として、各地で博物館や資料館、美術館、記念館、交流館、伝承館などが整備され、文化遺産の保存・公開や、さらには歴史的・文化的景観や町並みの保存・整備が行われてきた。このような歴史・文化資源は、直接的には経済効果を出しにくいものであり、公益性の高いものであることから、その管理・運営を支える自治体財政がこれらの存続に大きく影響する。平成の大合併は、自治体財政の効率化を目的としたものであり、市町村合併後には、地域の歴史・文化の保存・伝承に関する、いわゆる博物館事業が縮小化されるようになった。

そのような状況が各地で見られるようになったことから、「鉄の歴史村づくり」を推進してきた藤原洋氏が発案して「地域博物館協議会設立による市町村合併後の地域文化の保存・伝承活動」をテーマに、学識者及び各地の地域づくり実践者

に呼びかけ、平成20年度～平成22年度にかけて研究活動に取り組んだ。この研究活動では、各地の地域博物館の現状に関する調査や、研究会による議論を行い、地域博物館が地域づくりへ貢献する活動を展開することを目指す「全国地域ミュージアム活性化協議会」が構想された。「地域ミュージアム」とは、先に述べた地域の博物館や資料館、美術館、記念館、交流館、伝承館、さらに文化遺産や町並みも含めて、地域の歴史や文化を伝承するためにあるものを指す。

様々な議論を経て、平成23年9月、島根県雲南市吉田町にて「全国地域ミュージアム活性化協議会」を設立。理事長に、元文化庁長官・植木浩氏、そして理事は、当協議会設立までの研究及び準備を共に行ってきた学識者や地域づくり実践者、及び博物館関係者らで構成された。

その後、平成23年度～平成24年度にかけて、「ミュージアムと地域づくり」「地域ミュージアムと観光振興」「地域ミュージアムと産業づくり」「MLA(博物館、図書館、文書館)連携」「地域映像記録の保存活動」等をテーマに、研究活動を行ってきた。



写真3 全国地域ミュージアム活性化協議会設立総会
(島根県雲南市吉田町, 2011年9月)



写真4 地域づくりのための図書館・ミュージアムをつなぐシンポジウム(長野県小布施町, 2012年2月)



写真5 ミュージアムを活かした観光振興研究会
(島根県出雲市大社町, 2012年2月)

4 島根県におけるミュージアム・トラベルへの試み

上記の研究活動の中で取り上げてきた一つが、物語性をもって地域ミュージアムを含めた旅を楽しむ「ミュージアム・トラベル」である。

例えば、テーマ性をもった旅として、北前船の交易がある。たたら製鉄のように、山間部で生産された物資は河川交通によって海の港まで運ばれ、そこから全国各地へと出荷される。雲南市吉田町の鉄の場合、川船によって斐伊川を下り、松江港等から千石船に積み、松江藩の大阪蔵屋敷や九州、新潟、北陸等へ運ばれた。各地で鍛冶によって鉄製品として最終製品になり、刀剣や鉄砲、刃物や各種道具、日用品として使われていった。

鉄の荷を降ろした千石船は、その帰りに米や陶磁器、漆器などの工芸品を積んで戻った。こうした工芸品は、現在でも吉田町の中に数多く伝えられている。これらの一部は、「まち角博物館」として賛同する商店の店先にスペースを設けて展示され、鉄の歴史村における町歩きコンテンツの一つになっている。

このように、海を渡った千石船の寄港地には、そこに物資を集積した山間部との交易があり、地域の歴史をより広範囲な視点で知ることができる。ミュージアム・トラベルでは、こうしたテーマ性をもった旅の提案とコーディネートを地域ミュージアムが担っていかうとするものである。

5 高速道路を活かした中山間地観光への試み

(1) 事業の目的

平成27年3月、中国横断自動車道・尾道松江線が全線開通した。当地にとっては、念願の高速道路開通であり、松江方面、広島方面、尾道方面とのアクセスが大きく改善された。全線開通に先立って、平成25年3月には途中まで開通したことに伴い、当地における雲南吉田ICの供用が開始され、道の駅・たたらば壺番地がオープンした。

山陰と山陽とを結ぶ高速道路の開通の効果は大きく、出雲大社の大遷宮と相まって、道の駅たたらば壺番地には多くの来訪者があり、年間50万人前後の入込みがある。しかしながら、この道の駅から車でわずか5分の場所に位置する鉄の歴史村(雲南市吉田町吉田)への入込客数は多くはなく、高速道路開通前より落ち込む施設も出てきた。

ようやく開通し、交流促進への期待をもっていったがこれとは逆の結果に危機感を抱いた地元のNPO法人まちづくりコラボレーション島根(理事長: 藤原洋)では、高速道路の開通効果を地域への入込に波及させるための事業に取り組むこととした。

この事業は、鉄の歴史村を中心とするミュージアム・トラベルをテーマに高速道路利用と中山間地観光による地域再生を目指し、平成26年度と27年度の2か年にわたって実施するものである。

これは、財団法人国土計画協会の「高速道路利用・地域連携推進プラン」へ応募し、その採択を受けて実施するものである。

また、この事業主体は地元のNPO法人まちづくりコラボレーション島根であるが、ミュージアム・トラベルという視点から、全国地域ミュージアム活性化協議会及び一般社団法人鉄の歴史村地域文化研究所の3者が連携して取り組んでいる。

(2) 鉄山師の町の魅力づくり

鉄の歴史村が目指すものは、「知的観光地」である。これは、昭和62年に開催した国際シンポジ

ウム「人間と鉄～鉄生産の原風景～」において来村した当時の英国立ロンドン科学博物館長のニール・コスンズ博士や、アイアンブリッジ峡谷博物館館長のスチュアート・スミス氏との交流を持ったことを契機に構想したものである。

「知的観光地」とは何かを以下に引用する。

知的観光地は、学習施設の充実した観光地ということでは決してありません。人類の歴史を造ってきた土地を体感し、そこにある知性と対話しようとする来訪者のための観光地なのです。もっと簡単に言えば、そこにある知的好奇心から知を生じさせていくだけのポテンシャルを秘めていると言えます。(中略)知的観光地は過去から未来までの凝縮された時間の流れを体感し、思索する空間です。この生命力にあふれた知識によって、社会を活性化していくことが知的観光地の目的です。(出典『鉄の歴史村紀行～はじまりを伝える～』)

鉄の歴史村が知的観光地となるためには、ハード面、ソフト面ともに不十分であるが、その充実のために、民間の非営利団体で可能な事業を実施するものである。その中で、平成26年9月に、まち歩き拠点の施設として「鉄山師の町歴史館」を整備した。これは、鉄山経営者・田部家土蔵群をメインとする本町通りにおいて、周辺を含めたまち歩きのインフォメーションセンターの機能を持つ。施設は、田部家土蔵群の正面に位置する空き施設(所有は(株)田部)を利用したものであり、まち歩きの情報と共に、田部家の歴史や鉄の交易、鉄の歴史村づくりの歩みを紹介している。



写真6 鉄山師の町歴史館

竣工式では、田部家の協力によって建設された旧小中学校講堂においてコンサートを開催した。ちなみに、前日の準備では、島根県立大学短期大学部総合文化科の皆さんにご協力いただいた。

今後、鉄の歴史村づくりに関する資料の整理と調査研究を行い、これを地域のストックとしていく。また、学習会を開催し、地域内外の人々と共に学ぶ機会としていく。

(3) 中国横断自動車道・尾道松江線の沿線連携におけるミュージアム・トラベルの試み

中国横断自動車道・尾道松江線の開通によって、山陰と山陽との時間距離が短縮された。松江や尾道をはじめとして、観光客誘致の取り組みや、流通のメリットを活かした企業誘致も展開されている。しかしながら、その途中にある中山間地域への波及効果への取り組みは十分とは言えない。

そこで、ミュージアム・トラベルをテーマに、沿線地域における連携を図っていきたいと考えている。平成27年度に連携会議を開催し、沿線地域に高速道路の効果を波及させていくことを目指す。

当地においては、まずは、松江方面からの誘客をめざし、平成26年9月にモニターツアーを実施した。松江市内の新聞各紙の記者、松江市役所、松江観光協会、松江商工会議所、松江市内のNPO法人、国土交通省松江国道事務所、NEXCO西日本等の関係者にモニターとしてご参加いただいた。モニターの方々には、今後の観光地づくりへ向けて、ハード面、ソフト面での対策にあたっての参考となるご意見をいただいた。

また、平成27年3月には、首都圏在住者を対象としたモニターツアーを実施した。これは、山陰観光の場合、首都圏から出雲空港や米子空港、あるいはJR山陰線の駅を利用することが従来の主流であったが、今後は高速道路を利用し広島を窓口とした山陰への誘客を想定したものである。

1日目は東京駅を出発して広島駅へ集合し、呉市の大和ミュージアムや鉄のくじら館を見学。2日目は鉄の歴史村を見学。3日目は松江城周辺と足立美術館を巡るコースとした。テーマ性としての

可能性を見出すことができた他、鉄の歴史村における観光地づくりに対する課題も数多くご指摘いただいた。



写真7 モニターツアー(松江方面より, 2014年9月)



写真8 モニターツアー(首都圏より, 2015年3月)

(4) 中山間地観光への試み

高速道路による波及効果を生み出すもう一つの試みとして、南北に走る高速道路から、東西への広がりをつくっていくのが中山間地観光である。その一つが「鉄」の歴史を持つまちと「銀」の歴史を持つまちをつなぐ「メタルロード」である。

これは、たたら製鉄の歴史・文化を色濃く残し、それを今に伝える鉄の歴史村(雲南市吉田町)と奥出雲町とを結び、同様に中世から近世において栄えた石見銀山(大田市大森町)とを結ぶルートである。

奥出雲町には櫻井家、絲原家という鉄山経営者がたたら製鉄業を担い、吉田町の田部家と共に「鉄師御三家」と呼ばれた有力な家がある。現在は、いずれも「絲原記念館」「可部屋集成館」

において資料を公開し、博物館を運営している。

世界文化遺産に登録されている石見銀山では、天領当時の代官所跡にある石見銀山資料館が学術研究やガイド育成、教育普及活動等の積極的な博物館活動を展開している。

奥出雲町神話とたたら里推進室及び石見銀山資料館、そしてNPO法人まちづくりコラボレーション島根とでは、平成23年度より共同研究事業を進めており、一般社団法人鉄の歴史村地域文化研究所もこれに参画している。

現在の観光スタイルでは、中山間地観光においては公共交通機関が不備な地域がほとんどであり、マイカーに頼らざるを得ない現状がある。そこで、マイカー利用者が来訪の動機づけとなるストーリー設定とモデルツアーの提案を行うと同時に、安心してドライブできるための「セルフドライブシステム」を検討している。安心して走行できるルート選択であること、途中で楽しめること、休憩箇所の設定、所要時間や迷いやすい場所での案内表示等、詳細に検討を進めている。

今後、さらにブラッシュアップを行い、ドライバーへの普及を図っていく。

従来、中山間地はアクセスの問題やサービス機能の問題、安全性やプロモーション等の問題により、観光地として成立しづらい状況にあり、現在でも同様の環境にある。しかしながら、旅行目的や旅行スタイルの細分化、日本文化に深く触れることを好む外国人旅行者等、その需要は高まっていくことが推測される。インフラとしての高速道路を利用して中山間地域の交流人口拡大と地域経済の活性化、アイデンティティの確立等、その効果を高めていく一つのモデルを提案していきたいと考えている。

6 おわりに

「過疎」という言葉が生まれて半世紀が経つ。島根県は全市町村が過疎地域を抱え、未だこれを脱却した地域はない。「たたら製鉄」の歴史・文化が有するポテンシャルの高い可能性を追求

し続け、知的観光地としての「鉄の歴史村」の再生を、わずかでも現実近づけたいと願っている。

引用文献

- ・鉄の歴史村交流推進会議. 鉄の歴史村紀行～はじまりを伝える～, 28, 2005.

参考文献

- ・島根県. 島根県過疎地域自立促進方針－平成22年度～平成27年度－, 1－11, 2010.

受付:平成27年6月19日 受理:平成27年7月24日

しまね 地域共生 センター

*Shimane Center
for Enrichment through Community,
The University of Shimane
Junior College*



島根県立大学短期大学部
松江キャンパス



文部科学省
地(知)の拠点